

岐阜支部だより

- 1 — ◎巻頭言
- 2 — ◎夏の教育相談研修会報告
- 3 — ◎教育相談Q&A
- 4 — ◎夏季ワークショップに参加して
- 5 — ◎事務局だより



巻頭言

発刊によせて

日本学校教育相談学会岐阜県支部理事長

小森 芳順

例年のように文部科学省から平成19年度の児童生徒の問題行動等調査のまとめが発表されました。それによると、平成13年度に過去最多の人数を記録して以来減少傾向にあった不登校が、小中学校ともに再び増加傾向にあるようです。しかも、出現率1,20%（小学校0,34%・中学校2,91%）は過去最高の数値を示しているとのこと。

平成14年度に歯止めがかかり、減少傾向を示していた不登校が平成18年度から再び増加傾向に転じたのです。文部科学省が、不登校児童生徒が増えた要因を各都道府県教育委員会に複数回答で尋ねたところ、次のような回答が多かったとのこと。

- ・人間関係をうまく構築できない児童生徒が増えている（93%）
- ・家庭の教育力の低下（82%）
- ・欠席を容認するなど保護者の意識の変化（65%）

この調査結果を見ると、これからの学校教育相談のあり方を示しているような気がしてなりません。

今までのスクールカウンセラー等の配置を中心とした不登校対策が効果をあげてきていることは確かです。今後もこのシステムは必要だろうと思います。しかし上記の調査結果からは、スクールカウンセラーの設置だけでは解決できない課題も見えてきます。つまり、これからの不登校対策は、

「子どもの人間関係調整力をいかに育てるか」そしてその基盤となる「家庭の教育力をいかに高めるか」が課題となるからです。

この中でも特に「子どもの人間関係調整力の育成」には、子どもへのかかわりのキーパーソンである担任（教員）の教育相談的な力量が重要となってきます。当たり前といえば当たり前のことなのですが、スクールカウンセラーの設置以来学校の中には「教育相談のことは、スクールカウンセラーのような専門家に任せよう」というような丸投げの意識があったことは否めません。学校における教育相談は、専門家のものでなければ特別な時間に特別なことをやることでもありません。それぞれの担任の日々の実践の中にあることを改めて考えたいものです。

先日開かれた第20回日本学校教育相談学会全国大会での研究発表は言うまでもなく、岐阜県支部の研修・研究会での発表を見ていると、既にこれらの課題に向けてさまざまな実践がなされています。こうした実践を積み重ねながら、学校や子どもにとって必要な学校教育相談の在り方を、今一度見直してみる必要があるように思います。

この広報紙が、岐阜県の学校教育相談の確立に向けて会員相互の実践の交流や深化あるいは情報の交流に少しでも寄与することを願っています。

（平成20年9月14日）

◇夏の教育相談研修会報告◇

今年の夏の研修会は、8月23日（土）に、岐阜女子大学にて行われました。午前と午後に分けて2つの講座が開かれましたが、参加者は60名を超え、大変盛況でした。

【講座1】

「個別の支援計画の立て方について」

講師：後藤 尚子 先生

（長良特別支援学校コーディネーター）



<講話の概要>

○病弱教育支援センターの活動について

- ・医療、療育、福祉保健機関等との連携により、特別な支援が必要な子どもの生涯にわたる支援体制づくりをしている。
- ・主な活動として、教育相談、特別支援教育に関する研修会の実施、検査器具や教具の貸し出しを行っている。
- ・教育相談は、特別支援学校内の支援会議だけでなく、小・中・高等学校に在籍する児童・生徒に関わる保護者や担任との相談、また、通級指導教室と在籍学級との連携に関わる相談も行っている。十分活用して欲しい。

○個別の支援計画の作成について

- ・個別の支援計画は、生涯にわたって支援するためにある。3年先の姿を見据えて計画し、毎年修正・改善を図っている。
- ・本人が将来の楽しい生活を実現することを目的とする。支援計画は「本人の願い」→「必要な支援内容」→「各場面での具体的支援」の順で作成する。
- ・家庭、学校、医療、地域、進路の5つの場での取組や、相互のネットワークづくりを企画する。
- ・基本的情報（配慮事項など）を他機関に簡潔に伝わるよう、A4用紙1枚程度がよい。



- ・保護者と一緒に考え、保護者がこの支援計画のシートを持って自分で説明できるなど、当事者が本当に活用できることが大切である。

【講座2】

「LD児・ADHD児・高機能自閉症児等の理解と支援」

講師：尾崎 洋一郎 先生

（長崎県鶴南養護学校 校長）



<講話の概要>

○障害（しょうがい）の連続性

- ・遺伝的な要因を除外しても、障害のある子の出生率は2%を超える。
- ・LD系普通人、自閉系普通人、アスペ系普通人がいる。健常者と障害がある人との明らかな境目はない。

○軽度発達障害

- ・LD、ADHD、高機能自閉症がある。
- ・知的な遅れはないので、手だてや時間があれば出来るようになる。

○障害のある子への指導

- ・LD児は認知や表出の発達の一部分が弱いので、例えば必要な物だけ見える聞こえるようにする工夫が必要である。
- ・ADHD児は放っておくと行為障害になる可能性がある。ダメではなく、どうすればよいか具体的に伝え、本人の自己評価を下げないことが大切である。
- ・高機能自閉症児は、視覚で考えること、音や光に敏感なこと、想像力が弱いことが特性である。概念を視覚化する、見通しをもつ、一つ一つ順に処理することができるような配慮が大切である。
- ・本人が学習しやすいよう、周りの環境を整えること、自信を付けるかわりをする、特性から指導法を工夫することが重要である。

朝9:30から夕方4:30まで、丸一日間の研修でした。どちらの講座も大変具体的で、自校での指導や相談活動にすぐにでも生かせる内容でした。早速学校で他の職員に広めたいと感じる有意義な研修でした。

（文責：広報委員 安江 秀人）

◇教育相談Q & A◇

このコーナーでは、最近の教育現場で悩んでみえることについて、学校カウンセラーの先生にQ & A形式でお話いただくコーナーです。

Q:発達障害の子どもへの支援はどのように行うといいでしょうか。

A:発達障害の子どもは、学校という集団生活の中で色々な困り感を抱えています。集団活動に参加できなかったり友だちとうまくかかわれずトラブルを起こしたりすると担任は困りますが、一番困っているのは本人です。家庭においては、親もそのことを理解できずに困っている場合があります。

支援は、本人がどんな時どんなことで困っているのかを理解するところから始まります。例えば、イメージーションの弱い子どもには、遠まわしな表現をやめて具体的に指示をして理解を求めます。新しいことや変化に弱い子どもには、「同じことで飽きないでできる子」としてプラス思考でとらえます。そして、こんな時、こうしたらとてもよかったという情報を親に伝えます。担任が子どもと正対し本人の成長を願って、発想を転換して指導の工夫をしていくことが求められます。また、まわりの子への指導も大切です。外からは気付かれにくい障害は誤解を生み、益々本人を生き辛くさせます。一人ひとりのよさが発揮され、互いに響き合う学級経営が基盤です。

また、必要な情報を校内の先生方に伝え、適切に対応してもらえるようチーム支援の態勢を整えておきます。保健室や相談室との連携も大切です。きめ細やかな学校での対応は親にも伝わり、学校と手を携えて子育てをしていこうとする親のエネルギーを生むこととなります。一次的な症状は基本的には生涯を通して大きく変化しないことが多いと言われます。気をつけなければならないのは二次的障害となって問題化することです。子どもの特性に応じた環境をどのように用意するかということが支援のポイントです。

下呂市立萩原小学校 教諭 堂前 計枝

Q:保健室登校や相談室登校の児童生徒を学級復帰させるときの支援の具体を教えてください。

A:まず、援助者である担任や養護教諭や相談員等と、対象となる子どもとの信頼関係がどこまで進んでいるかが重要になります。私が考える信頼関係づくりの第一歩は、わがままと思われることでも出来るだけ受け入れていくこと、そして子どもが「やってみる」と思ったことを支援しながらも、「いつでも止めていいよ」という気持ちで無理をさせないことです。援助者が子どもにとって『無理をきいてくれる人』になると、子どもも援助者の思いを受け入れようという気持ちになっていきます。この時が教室復帰のチャンスです。あくまでも子どもを教室へ向かわせるのは、これまで信頼関係を築いてきた養護教諭や相談員です。学級へ行くようになると、子どもは今まで以上の我慢が必要になってきます。そこで今度は、担任が子どもにとって『無理をきいてくれる人』となりましょう。例えば、座席位置を廊下側の一番後ろにして、いつでも教室に入ったり出たり出来るようにします。最初は教室の雰囲気になれる目的で、5分程度で担任が声をかけて教室から出させてあげるのも、子どもにとっては安心できる配慮のようです。発表はしなくてもよいようにすることも必要かもしれません。とにかく担任は子どもと話し合い、教室復帰にあたってのルールを細かく打ち合わせすると良いと思います。

合わせて担任は、学級の仲間への理解を進めます。時に「特別扱い」に対する不満が出ますが、その子ども支援が必要な子だと受け止めましょう。ほとんどの子は「自分も困ったときに助けてもらえる」と考えています。そして、担任の不登校の子どもへの接し方は、学級の子どもたちにとっての『かかわり方のモデル』となっていきます。

羽島市立竹鼻小学校 養護教諭 大見 真智子

このコーナーで学校カウンセラーの先生に取り上げてほしい内容がございましたら岐阜県支部事務局（E-mail : sodan-gifu@plum.ocn.ne.jp）までご連絡下さい。

**日本学校教育相談学会
第20回総会・研究大会
第9回夏季ワークショップ参加報告**
開催日：平成20年8月6日(水)～8日(金)
会場：昭和女子大学

【 教師のための家族療法 】

駒澤大学教授 八巻 秀 先生

家族療法とは

Therapy of family ではなく

セラピー オブ ファミリー

Therapy with family (家族の力をかりて治す)

セラピー ウィズ ファミリー

- ① 家族療法的「ものの見方」の体験
円環的思考訓練「昔話 浦島太郎を使って」
- 疑問を持つ(乙姫様は何故開けてはならないものをくれたのか?)
 - 仮説を立てる(開けることを予想して時間の経過を教えるため)、(約束を守ったらまた竜宮城に戻して結婚するつもり)
 - 疑問を持つ、その疑問に答えるように、出来事をイメージしながら仮説を立てていく。その練習を繰り返し行う

(円環的思考) 家族療法基本指針

雰囲気合わせ→情報収集→仮説設定

(収集し直す) ↑ ↓

← 働きかけ (声かけ)

- ◆もしうまくいっているなら、それを直そうとするな。
- ◆もし一度うまくいったなら、またそれをせよ。
- ◆もしうまくいかないのなら、なにか違ったことをせよ。

リラックスタイム 3・2・15の呼吸法

鼻から3秒吸う⇒2秒腹にとめる
⇒15秒で吐く。 脳を休めたいときに6セットでホット

- ② 「家族と良好な関係をつくるため」の体験 ロールプレイ

共感から理解と共鳴のカウンセリングに・・・

聴き方にギブスを当てて聴く

(相槌を多く・大げさに・質問は少なく・強弱をつける・ジェスチャーを入れて・声に出して相槌をするなどなど)

傾聴・ジョイニング

(地図作成のワーク)

話し手の家から学校までの高校時代の通学路をメモを取らずに聴く。その後、話を思い出して、通学路の地図を描き、話し手に渡す。(イメージしながら聴く)

ジョイニングのための4つの力

観察力・傾聴力・反応力・質問力

ジョイニングがうまくいくと・・・

- ◆ 情報収集がスムーズ
- ◆ 指示が入りやすい
- ◆ 相手との交流が楽
- ◆ 相手の行動や思考に変化が起これ始める
- ◆ 面接空間がざっくばらんな時間・空間になり、負担が軽くなる。

ちょっと待て！指導の前にジョイニング

各務 公美

(学校カウンセラー、恵那市教育委員会)

事務局だよ！

◆ アンケート御協力をお願い ◆

支部会員・正会員の皆様に、夏季研修会の案内と共に、アンケートを送付させていただきました。今後の活動をより良い物にするために、ご協力をお願いします。

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第1号

2008年(平成20年)9月30日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ <http://www1.ocn.ne.jp/~sodangif/>

E-mail : sodan-gifu@plum.ocn.ne.jp